

B—28 Chanel の美意識について

大分大 釘宮 久美

1. 作品は物質であると同時に精神であり，形式であ

ると同時に内容である。個別的、局地的なものでありながら同時に普遍的な証人でもある。現代フランスの作家、Chanel の作品は、広く国際的に滲透しているが、その装飾様式は、独特な性格を持つ。日本的体質にとっては、異質のものであり、対照的とさえ思われ、理解に困難な感覚と秩序を持つ。このゆえに、限りない興味と、解明の意義を見出すのである。

2. 1954年より1965年にわたり、Vogue 誌より抜粋した作品を資料として、その造形美意識の分析考察をこころみた。

3. 同一傾向の形態をたえず追及しながら、服装構造要素の要約を試み、人体を基本形で包もうとする傾向を見出す。この作家の活動開始の時期が、20世紀初頭であり、機能主義との少なからぬ同調を思わせるが、庶民性への愛着を示す自由な精神の反映とも受取られる。一方細部の装飾傾向が、バロック的傾向を帯びていて、特徴的なのは、繰り返し使用しているブレードによる装飾と、数連のネックレスの取扱いである。この豊饒、絢爛な造形の一秩序は、フランスの伝統に内在するチルト系造形意識の現われとも思われる。洗練とも過剰ともつかないこの装飾美意識に、矛盾と疑惑を覚えながら、それが、この異質な感覚の本質でもあると思われるのである。